
ムック

ぬじゃわきし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ムック

【Nコード】
N3680M

【作者名】
ぬじゃわきし

【あらすじ】
ポンキッキのムックは実は凶悪な寄生怪獣だった！？人々に襲うムックの恐怖！

夜。奈穂子と達志はデートで映画を観た後に街を歩いていた。その内公園に着いたので二人はベンチに座った。二人の向かい側のベンチに公園に住む小綺麗なホームレスがちくちくと何か服を縫っていた。二人は話した。

「映画、面白かったねー。」

「主役がかっこいいよな。」

「『お前に咲かせる花はねえ』ってセリフ。かっこいい……」
「良かった。」

「ねえ、達っちはどう思う？あのラスト。」

「うっん、俺は、あれで良かったと思う。あの悪者、どこことなく悲哀を感じるし。」

「ふーん、あ、メールだ。あ、ねえ、見て。」

「何？」

「この間、友達とプリ行っただ。」

「ふーん、可愛く撮れてるじゃん、奈穂ちゃん。」

「ありがと。達っちもかっこいいよ。」

「そうかよ？」

その時、「その若いお二方！」としわがれ声で呼ぶ声が聞こえた。二人は振り向いた。恐らく向かい側のホームレスだ。ホームレスは顔を下に向けたまま話した。

「あなたたち、夜遅いんだから、早く帰りなさい。」

達志は舌打ちして言い返した。

「なんだよ？俺達の勝手だろう？何が悪いんだよ？」

「悪い悪くないの問題じゃない。身の安全のためだ。早く帰りなさい。」

奈穂子も不安になって「帰りましょう」と達志に言ったが達志は再び言い返した。

「俺ガキじゃねーんだぜ。そこらのワルから身を守るぐらいの力はあぁ。」

「では言おう。この公園の周辺で、『ムック』という怪物が現れているのだ。下手に手を出さない方がいい。」

「ムック？ポンキッキのムックか？」

「そうだ。」

「ははっ、おっさん、何を言ってるんだ？行こう奈穂ちゃん。別の場所に行こう。こいつは頭が病気なんだ。」

「まあ、そう思っていればいいさ。まあ何かがあったらいつでも相談に乗ろう。緑のテントにいるよ。」

「なんだこいつ。行こう」

奈穂子と達志は公園の別の場所へ行った。そしてベンチに座って話した。

「へんなおじさんだね。」

「そうだね。」

「ムックって何だろう。」

「気にするな、おっさんの妄想だ。」

「あ、何か落ちてる。」

「ホントだ。何だろう…あ、鉄のパイプだ。誰かテント建てて放つといたんだ。」

「可哀想に…でも何でだろう？慌てたから？」

「ばか、お前ムックの事考えてるだろ。たんに忘れただけだよ。俺よりムックの事考えて。」

「もー嫉妬深いのね達っちは。」

その時、高い高い悲鳴が聞こえた。奈穂子はびくつとして訊ねた。

「…何かしら。」

「…気にするな、ただの悲鳴だ。」

「そうかしら」

再び別の悲鳴が聞こえた。奈穂子はそわそわした。

「いやよ、何か起きてるんだわ。行きましよう。」

「大丈夫じゃね？」

「何言ってるの！」

次の悲鳴と共に、沢山の足音が聞こえた。大勢の人々がこちらに向かって逃げてきた。ある人が言った。

「早く逃げる！やって来るぞ！わあああ！」

人々が一目散に散り、奈穂子は振り返った。その途端奈穂子は恐怖で逃げるところか動けなくなってしまった。何かが驚くほど速くこちらに接近してくる。それは紅かった。紅い触手に覆われ、走る度に触手は高速に蠢いていた。目が見えた。その目は飛び出していてあらぬ方向を見ていた。口もあつたが、中は闇のように真っ暗だ。その名はムック。

「危ない！」

達志は奈穂子突き飛ばした。二人の間にずぼぼぼとムックがベンを突き破って通り過ぎた。ムックは停止し、何本も生えている触手の足で後ろを振り返った。

「きゃあああ！」

奈穂子が悲鳴を上げた時、達志は先程持っていた鉄パイプでがんとムックを殴った。ムックは「ぎええええ」と悲鳴を上げてのたうち回った。達志は何度もムックを殴った。途中ムックの触手が達志の足に伸びて「アツツ！」と火傷したが、達志はめげずに殴り続けた。やがてムックは力を失い、触手は溶けた。中に痩せ細った人間のような者が出てきた。

「これは？」

「さあ…達っち大丈夫？」

「俺は大丈夫さ。」

「でも、足…」

「なあに、ただの火傷だよ。大した事はない。」

「でも病院行きましよう。」

「そうだな…」

二人は公園内を歩き続けた。達志は軽くびっこを引いてる程度で大した傷ではないみたいだ。沈黙した状況を励まそうと奈穂子は言った。

「何か映画みたいだね。」

「そうだな。ははははは。」

「あははははは。」

「ははは…ん？」

突然達志は立ち止まり下を見つめた。どうしたの。奈穂子の無言の問いかけに彼は応じない。しばらく沈黙。

そして、達志の火傷から突然一本の紅い触手がぶちつと生えてきた。

「きゃあ！」

触手は奈穂子を捉えようと必死に伸びて蠢いていた。達志は呆然として彼女を見た。次の瞬間、ぶちぶちぶちと触手が生えてきた。達志は跪き、その内両腕が奈穂子に伸び、言った。

「わわわわわ、手が勝手に！」

触手はますます密生するのを見て奈穂子は逃げ出した。達志はムックになってしまったのだ。

必死に逃げ惑う奈穂子の背後で、しばらくして「ごおおぶううう」

と吠え声が夜空に響き渡った。奈穂子は全力で逃げ出した。

その時である。

「こちらへ！」

先程のホームレスが車から奈穂子に呼びかけた。奈穂子は急いで車に乗った。車は走り始めた。

奈穂子は助手席にいた。そして運転手を見た。今の今までホームレスの顔をはつきり見なかったが、このとき確認した。出っ歯でたれ

目、そして緑色の皮膚。

「あなたは！！！」

「そうだ、私はガチャピンだ。大人になった途端ブサイクだと言われ失業したのだ。」

「でも……どうして……ムックは……」

「そもそもポンキッキは異星人交流の場として用いられた番組だ。そう、私は、異星人だ。ムックも。だが、ムックは言葉が話せなかった。だから地球人がアフレコをつけたのだ。」

「……」

「ムックは、バンドミン星人に寄生しているうちはおとなしかった。だが、ある日、人間に寄生した途端、凶暴になったのだ。原因はわからない。私はムックを退治しに行った。そしてムックはここに追い込まれた。」

「……」

「残ったムックはあと一体だ。たぶん、この車を追いかけている。後ろをみてごらん。」

奈穂子は振り返った。ぞぞぞぞと全身から触手を生やしたムックがこちらに向かって猛烈なスピードで追いかけていた。徐々に接近している。

「ぎゃあああ！！！！早く逃げてよ。」

「分かっている！だがあいつは速過ぎる！やつをまこう！」

そしてガチャピンはハンドルを回して、急激に右折した。ブレーキの音が鳴り響く。そしてさらに左折し、右折し、右折した。しんとした都会の角。「まいたかな？」とガチャピンは言った。次に指示した。

「車を捨てよう。」

「え？でも歩いたら……危険では……」

「大丈夫。任せなさい。言っておくがムツクの嗅覚は排気ガスをも見分ける。だから乗ってもムダだ。」

そしてガチャピンと奈穂子は隠れた。しばらく待った。ガチャピンは武器のようなものを取り出した。

「え、殺すの！？だめだよ、あれはムツクでも私の大事な達志なんです。」

「分かっている。」

やがて物音が聞こえた。ビルの上から影が現れた。ムツクは虫が歩くようにぞわぞわとビルの壁を高速で徘徊した。あたりは暗くて、ムツクは黒色にしか見えない。

ふとガチャピンは飛び出した。ムツクは気づいてガチャピンに襲い掛かった。ガチャピンは持っているその武器を発射した。

ブシュン！

それはムツクに命中し、ムツクは急激に動きを失った。触手の動きも萎え、どろどろと溶けた。麻酔銃だったらしい。やがて液体の中から達志の身体が現れた。

「達志！」

だがガチャピンに静止された。

「あなたも感染してはいけない。とりあえず彼を病院に運ぼう。」

そして幸い達志は無事であった。ムツクは無事摘出された。二人はガチャピンにこれでもかというほどお礼をして、病院を後にした。

さて、ムツクは、病院の研究室の水槽に保管されていた。無数の触手がわらわらとうごめいている。病院の職員が書類をぼんと置いたとき、その衝撃で、一瞬水槽のふたが動いた。

その時、触手の一本がゆつくりとふたの隙間から抜け出した。職員は大あくびした。その時。

「ぬあああああ！！！！！！」

ムックに襲われ、職員はあわや苗床となった。ムックは研究室を抜け出し、病院内を徘徊し始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3680m/>

ムック

2010年10月9日20時41分発行